

第19回「文芸思潮」エッセイ賞 発表

第19回
文芸思潮
エッセイ賞

エッセイ賞は明年もまた同じ要領で募集いたします。
どうぞ奮って皆様の作品を御寄せください。心からお待ちしております。

「文芸思潮」エッセイ賞

最優秀賞

「ガザに生きて」

下田ひろみ

(三重県津市)

二〇二四年度第19回「文芸思潮」エッセイ賞は、一三六篇の御応募をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。昨年よりかなり少ない数で、優秀作品も減少するのではないかと危ぶまれましたが、蓋を開けてみるとまったくの杞憂で、質も向上しているばかりか、優秀作の数も例年より多く、選ぶのに苦労するほどでした。優秀賞・奨励賞以上のレベルの高い作品が犇き合いたいへん密度の濃いコンテストとなりました。十代から九十代までの幅広い年齢層と同時に、地域的にもアメリカ、アジアなどから広く寄せられ、それぞれ貴重な体験や社会批評を込めた、豊かな内容となりました。

例年の通り、まず予選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、さらに選出された最終作品を対象に、水木亮、都築隆広、五十嵐勉三人の選考委員によって八月四日山梨県甲府市において最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀賞・優秀賞作品を発表させていただきます。以後奨励賞も誌上に掲載させていただきます予定です。

優秀賞

「プラハの街角にて」

深山彌生 (千葉県船橋市)

「母の満州」 中田重顕 (三重県熊野市)

「ひと夏とイルカと」

高たかよ (愛知県名古屋市中)

「南北之塔」 青地久恵 (北海道釧路市)

「ひとつの約束」 小林宏子 (北海道札幌市)

「みそまんじゅう」 瀧沢鈴 (北海道函館市)

「西日」 宮尾美明 (愛知県愛西市)

「『団子ちゃん』は何者?」

林 須磨 (京都府宇治市)

「乳を取る」 三浦みな子 (島根県出雲市)

奨励賞

「背筋」 中村郁恵 (北海道札幌市)

「灰香」 桜藤 伸 (千葉県千葉市)

「運命を生き抜いて」 豊代恵子 (石川県金沢市)

「地獄で生きている」 青田雪生 (徳島県徳島市)

「土葬、遙かなる」 丹波藏堂 (愛知県江南市)

「回想録、夜の街」 柏村ねお (宮城県仙台市)

「遺伝性疾患に苦しむ我が子ジャーマン・シェパード」 村松佐保 (群馬県吾妻郡)

「大統領選挙を控えて」

荘百合子 (米国ヴァージニア州)

「歴史を紡ぐ麦」 勝山 稔 (宮城県仙台市)

「前を向いて生きる」 いっちゃん (岐阜県羽島市)

「ロバのパン、追いかけて」 今井清賀 (大阪府和泉市)

「不思議な体験」 田中美晴 (大阪府豊中市)

「いのち」 佐藤邦夫 (茨城県神栖市)

「運命の一手」 地伊田月夫 (岡山県岡山市)

「引き揚げ船の悲劇」 西島雅博 (福島県いわき市)

「オンリー・イエスタデー」米山哲雄（山梨県甲斐市）
「イヌワシとクマタカ」松浪丞（新潟県村上）
「サボテンの花」姉齒浩一（東京都八王子市）
「爺のお宝」竹浪和夫（青森県むつ市）
「ひたむきな、余りにひたむきな」三鶴（静岡県御殿場市）

「医者に匙を投げられて」森崎律子（大阪府大阪市）
「学生と共にコロナ禍と闘った日々」和泉勇希（大阪府枚方市）

「煎茶道と私——売茶翁との出会い——」

中牟田桃園（奈良県橿原市）

「第二の誕生日」ラッダ政美（兵庫県神戸市）

「西別川源流の自然」塚田伸幸（北海道釧路市）

「夫婦は相身互い」内藤栄介（東京都新宿区）

「鳥の道」矢野吉晴（青森県青森市）

「心の帰港地」杉本宣子（京都府福知山市）

「もう少し早く戦争が終っていたら」

葩島彊子（北海道札幌市）

選評



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ
79「流謫の島」で群像
新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売
新聞・NTTプリンテック
主催第1回インターネット
文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館
文学賞受賞

ハイレベル目白押し

五十嵐勉

第一九回の文芸思潮エッセイ賞は、応募総数が昨年の一七三から一三六と減ってしまった。その事情から、いい作品の数も減っているのではないかと大いに心配したが、蓋を開けてみるとそんな心配は吹き飛んでしまった。むしろ昨年よりも優秀賞・奨励賞レベルの作品が多く、いい作品が目白押しで、うれしい悲鳴を上げたほどだった。前回以上にどれを落とすか、どれに泣いてもらうか、悩む事態となった。

最終選考はいつも5点法で採点される。5点は最優秀賞、4点台は優秀賞、3点台は奨励賞、2点台は佳作、1点台は入選、それ以下は選外となる。集計して選考委員の合計点の高い順から並べていくのがいつもの方法だが、普通に考えれば選考委員三人（今年も三神弘選考委員が病気のため欠席）の合計点が9点なら、奨励賞に値する評価と言える。ところがこの合計9点以上の作品はなんと53作品あった。少し基準を上げて合計10点（平均3.3点）以上はどうかと見てみるとこれも39作品ある。また私個人で4点以上を付けて優秀賞でも可とした作品は、何と22作品あった。評価はけっして甘いわけではなく、「文芸思潮」に載せられるかどうかという点ではかなり厳しい。それにもかかわらず、これだけの数の作品が高得点を得ているということは、驚異であり、いかにハイレベルか実感される最終状況だった。いきおい、奨励賞の数が多くなり、優秀賞の数も多くなることが予想された。

そういう中での本選考で、まず当選作を第一にずばり決めるのだが、こちらはのっけからすんなりとはいかなかった。私は下田ひろみ氏の「ガザに生きて」を第一に推した。この作品は、今パレスチナで起きている戦争に深く踏み込んだ内容で、自身が九〇年代にガザで教えた音楽授業を通して、そこで触れ合った人々との繋がりと体温から、現在の悲劇と希求を立ち上げている。イスラエル通過のビザ記

録があるとヨルダンなど中東諸国には入れないとか、アメリカのイラク攻撃の際の報道がいかにも信じられないものであったとか、実際にそこに踏み込んだ者でなければ書けない叙述は、強烈なりアリティがある。筆者がヨルダン經由でパレスチナに入り、そこで教えた音楽によって得た人との繋がりは、生身のものとして共鳴する。そしていまイスラエルからの理不尽な攻撃でガザが破壊されつつあるとき、そこで教えた聾学校や人々はどうなっているのか、その人間同士としての繋がりを元にした憂いと怒りは激しく心を揺さぶってくる。人間としての真の絆と怒りがここにはある。平和への基盤となるものがある。私はこれに満点の5を付けて強く推挙した。

他の選考委員が躊躇したのは、現在ガザが戦争の渦中にあり、報道の洪水に曝されているためあまりにタイムリすぎて迎合的に見える点、また最後の部分に俳句があり、これが全体のドキュメント性と合わないのではないか、という二点であるが、ここに書かれたアリティと平和への希求の痛切さは本物であり、あくまで実体験に基づき、流動的、一時的なものではけっしてないこと、また俳句は稚拙であり、作品として整合しないが、そのぎこちなさの中にむしろ溢れる真情が率直に伝わってくることを理由に、主張を貫いた。なんとか納得してもらってよかったと思っているが、この筆者の体験に根ざした痛切な訴えには、万

ている。

私が最優秀賞に近い高得点を付けたのは松藤仲氏の「灰香」である。この作品は深く愛した一〇〇歳の祖母の死と収骨までを描いたものだが、死に際の祖母とのやりとりも克明で「焼かれたら熱いだろなあ……嫌だなあ」「死んだら終わりだあ……」という言葉聞きながら、なぜだかわからないが「勝手に体が動いて」祖母の髪を鋏を当てて切り取り、「携帯のカメラに祖母といっしょに手を繋ぎ写真に収めた」。そしてそのあと二、三〇分であっけなく祖母は息を引き取る。生と死とを分ける最後の幕切れもさりげなく自然で、しかも死を漠然と感じて体が動くそれが、意識下の深い命の感受を体現している。そしてその祖母の骨を焼いたとき、そこから漂う骨の匂いに祖母の懐かしい匂いを嗅ぐ。それは、深い愛着を覚える者だけに届いてくる骨の匂いだった。ここには、祖母への深い愛が漲っており、祖母から孫へ伝わる確かな命の絆がある。それは命の相として大事なものを現代に突き突き付けてくることを実感した。奨励賞に留まったが、私の評価は高く、尊いものを宿していると思った。

優秀賞の中田重顕氏の「母の満州」は二歳で満州を引き揚げてきた筆者が母の満州での姿を求めて、渡満し追懐するエッセイである。満州の白亜の病院で自分を産んだという母の文章を頼りに、その辺りを訪ねるが、茫洋として、

人の胸を揺さぶる真情がある。多くの人に読んでもらいたい作品である。

今回のコンテストには海外ものが目立った。深山彌生氏の「プラハの街角にて」は、一九六八年のチェコスロバキアの民主化をソ連軍が侵入・弾圧して抑え込んだ事件を追体験するために、現地を訪れて当時を触感する内容だが、ここには単に野次馬や傍観者に留まらない特別な情熱の滾りがある。ストーリーの流れは当時のプラハの民主化を現地で書き留めた春江一成著「プラハの春」に感動し、それに触発されてチェコの現地に赴くのだが、弾圧され、抹殺される事件が、最終的に二十数年後ベルリンの壁の崩壊によって実現される、歴史の深い相を体感する感動に繋がっていく。書き残された言葉が生命力を持って再生され起き上がってくるところに、このエッセイの歴史に向かい合う雄勁な力がある。「命をかけて真実を語る言葉は無敵であり、永遠の力を持つ真理となる。言葉は魂だ」「既成権力によって立つ権力基盤を脅かすものを過酷に弾圧し、排除しようとする。しかし歴史の流れにおいて永遠なる権力はない」一つの書物がこのように人の心に深刻な刻印を残し、現地に足を運んでさらにその志向ベクトルを深めようとする力を育むものであることにも驚きとともに信頼を湧かせてくれるが、筆者がこれらを通して歴史の深い相貌を体で感じたそのことに、意義があり、ここにその感動が鳴り響い

広い満州の緑野に記憶が溶けかかる。案内の中国女性の反発的姿に重なつて、何かが見えてき、何かが溶け消えていく。むしろそこに茫漠とした満州の姿が立ち上がってきて、戦争の時代の果てしなさに埋められていく。夢幻に溶けていく平原と時間に、母親への郷愁と満州の実感が鮮やかに浮かび上がってくる味わい深い作品だった。

青地久恵氏の「南北之塔」もおそろそかにできない濃い内容を有している。これは沖縄戦で戦死した北海道出身の兵の慰霊塔に詣でる話だが、沖縄戦でこれほど北海道の人々が戦死しているということも知らなかったし、そのための供養の塔までが立てられているということも初めて知った。アイヌの人たちを含め、北から南へ移ってそこで果てた北海道の人たちを供養し続ける心にも打たれ、今でもはるばる詣で、当時への思いを深くする人々の存在に、畏敬の念を覚えた。犠牲者の思いを汲み取るうとするその深い心が胸に深く刻まれた。

同じく優秀賞の高たかよ氏の「ひと夏とイルカと」は、水族館のアルバイト体験を記したものである。水族館を内側から描いたものはこれまでになく新鮮で、何種類ものペンギンやタツノオトシゴ、タカアシガニなどだけでも珍しい上に、イルカのダイナミックなショーがある。それに身近で接する密着的な感動が鮮やかに伝わってくる。「イルカたちの目の前まで寄って行った。すると今度は、イルカ

たちがキューキューと、途切れることなく声を出していることに気付いた。一枚のガラスを隔てて、自分とイルカだけが対峙するという初めての体験。私が立ち去るまでイルカたちはその場から動くことなく、ずっとこちらを見つめて声を出し続けていた」というシーンは、イルカの人に寄せる思いが伝わってきて、いじらしくなる。「こちらに寄ってきて、こちらを見つめて続けて何を訴えているのか。キューキューという声で何を求めているのか」とさらに問うそこに、イルカの生きている存在を受け止める温かみがある。自然と生命への交感が伝わってくる作品だった。

小林宏子氏の「一つの約束」は、ニューギニア戦へ向かった父親の遺言「私が死んだら高野山に骨を収めてほしい」を七十九年後に果たすストーリーで、母親も兄も果たせなかったその遺言を、当時一歳半だった自分が果たすことになる。三十七歳で戦死した父親と一〇一歳まで生きた母親の二人の写真を納骨の手続きを通して納めるわけだが、そこに覚えた「やっと両親は一緒に眠ることができる」という感慨は深いものがある。「花の生命力に自分を宿して雑草のように生きてこられたのは、父の熱い願いだったと思う」と死者と心を通わせそこから生きる力を得る構造は、目に見えない普遍的な力に通じている。

今回は高齢者も大活躍だった。優秀賞の「団子ちゃん」は何者?」の林須磨氏は九十一歳、「みそまんじゅう」の

瀧沢鈴氏は九十七歳である。この年齢になってもこれだけのしつかりした、しかも味のある文章が書けるということは、我々にも勇気を与えてくれる。「文芸思潮」の読者にも励みになるはずである。

「団子ちゃん」は何者?」は、娘とともに老人ホームに入居するが、それ以前からあった娘の腹部の「脂肪肉腫」が変化し始める。最初は「良性」だったが、やがて「悪性」と診断される。その得体の知れない異物を「団子ちゃん」と呼んでいたものの、しだいに悪化し手術が必要になる。精神的に荒れた一時期を超えて結局手術を受け、うまく成功するのだが、最後までその肉腫を「団子ちゃん」と擬人化し「団子ちゃんはお行儀がよかったんだね」と明るく褒めるところに、筆者の温かみが匂ってくる。筆者でなければできない、事態を明るくする捉え方は大きな救いになる。「みそまんじゅう」は函館のお台場を舞台に繰り広げられるドラマである。いつもひっそりと港の踊り場でみそまんじゅうを食べていた学生が、あるときから突然見えなくなった。ほどなくしてその学生の両親が突然訪ねてきて、その学生が肺結核で亡くなったこと、お台場のそこを自分のお気に入り場所「台場基地」として、いつも楽しんでいたことを告げた。お台場の変化に何十年の時の流れを乗せて浜風が吹き寄せる無常感、独特の味わいがあった。

奨励賞にも海外の生活からの視点が反映されていて、「大

統領選を控えて」(莊百合子)は、日本では感受できないアメリカの大統領選の空気が伝わってくる。ここにさりげなく入れられた「万民のための自由と正義」という言葉など、日本ではけっして現れず使われない発想で、こうしたところにアメリカの民主主義の土台があることもよく届いてくる。また同時にその理想を掲げながらも、現実の複雑なしがらみや泥沼から抜け出せない病める現状も窺われる好レポートになっている。

異色なのは「煎茶道と私」売茶翁との出会い(中牟田桃園)と「回想録『夜の街』」(柏村ねお)で、どちらもその道の徹底した姿勢に、貫きが華を咲かせている。表面きは逆の世界だが、一途な情熱を、一方は狭いひとときの空間に、一方は華美だが、献身による明日への慰安に、貫徹させるその姿勢に、研ぎ澄まされた心の美が宿る。どちらも実際に味わってみたくなる魅力が醸し出されていた。

先の戦争に関する作品は奨励賞に三つあり、「もう少し早く戦争が終わっていたら」(配島強子)と「引き揚げ船の悲劇」(西島雅博)はどちらも戦争直後の引き揚げの状況や事情をよく伝えていて、胸に迫るものがある。「引き揚げ」という言葉はだれもが知っていて、外地から日本へ戻ってくることは、頭では理解できても、その実情はなかなかイメージできないが、この二作は当時の状況をありありと浮かび上がらせてくれる。その筆致の裏に戦争への怒

りと憎しみが湛えられており、いつそう鮮やかな刻印となって胸を打ってくる。配島氏が「もう少し早く戦争が終わっていたら」という後悔と告発に繋げるのも説得力があるし、西島氏の描く春子の悲劇も切迫力がある。ただ、西島氏の作品は小説的な色がやや濃くなっているのが気になった。もう一つの「背筋」は、シベリア抑留の義父が持ち帰ったスプーンに当時の強制労働の苛酷な生活を投影させているものだが、スプーンの佇まいに宿る象徴は鮮やかであるものの、肝心の抑留生活そのものがほとんど伝えられていないのは、片手落ちであるように思われた。

生命に関するエッセイはやはり常に感動を呼ぶ。「いのち」(佐藤邦夫)は我が子という新しい命への誕生を素直に表現していてみずみずしいし、「遺伝性疾患に苦しむ我が子ジャーマン・シェパード」(村松佐保)は、犬と同体の愛情の濃さが胸を打ってくる。命は種を超える共感であることが理解される。「第二の誕生日」(チキータ)も生と死の境のきわどさ、尊さを認識させてくれる。

「心の帰港地」(杉本宣子)は、北朝鮮へ帰らない道を選んだ女性の、「私の魂の還る場所はどこにあるのか」と問いつつ、育った新潟の地を訪れる回想は、深い穿ちが普遍的な響きを奏でて届いてくる。心に染み入るものがあつた。自分の心を探るものとして、それとやや反対に位置する「サボテンの花」(姉菌浩一)も屈折した心模様の中に深い味

の残る作品で、曲折する自分の心理の向こうに佇む生きる植物の姿が何とも言えない対峙を示していて、生きることを見つめ合う共感を醸している。

大きな自然へ眼を向け新たな発見と認識を伝えているものがいくつもあり、あらためて感動を覚えた。「歴史を紡ぐ麦」(勝山稔)は、麦という品種の生態を普段捉えない角度から照射して、人間が飢餓から解放された原点を知る思いがした。「西別川源流の自然」(塚田伸幸)も、北海道の川の源流に鮭・鱒の稚魚を小学校の子供たちと放流する話は、清冽な自然が新たな相貌で広がって、大きなものに育まれているこの世界を開示してくれる。貴重なエッセイに心が洗われる思いがした。最後の「森と川が豊かで、そこに住む動物が守られていなければ、我々人間の生活も守られない」という言葉が身に染みる。

またこの領域に属するものとして「イヌワシとクマタカ」(松浪丞)「鳥の道」(矢野吉晴)も、大自然の中で生きる動物の鮮やかな姿が描かれていて、厳しさの中で息づく命の大きな営みを感じさせられた。「鳥の道」は渡ってくる白鳥の生態を、身近な近隣者として付き合う様子を綴ったものだが、広大な自然の中での触れ合いは白鳥に親しみを覚えさせ、その厳しさの中で生きる姿に感動を喚起する。またそのことは、真に畏敬すべきもの、尊ぶべきものを教えてくれる。こうした自然への素直な感受が失われ

るとき、文明や現代文化は腐食衰微の道を辿るだろう。その意味でも、こうしたエッセイが寄せられてくることは、大いに喜ばたいし、歓迎したい。

奨励賞には不運にも届かなかったが、いい作品、心に残る作品、ぜひ文芸思潮誌上に乗せて多くの人に読んでもらいたい作品は少なくない。「前途晴朗なり」(小倉一純)「白鳥の歌」(白葡萄)「サントーシヤさんと話して思う事」(宮原真希)「ロンドンにあえて幸せ」(壬生智恵)「墓場の前の別荘」(林英二)「日本の心」(新垣景和)「ノアガーデン」(エリザベス)「栗山佳子」(似て非なる二人)「柴田節子」(八十路の戸惑い)「ゴルビー長田」(人生の勲章)「澤井樹生」などは、スペースがあればぜひ載せたい作品である。現代は、機械化、自動化が進み、年々人が他人のために動き、自ら働いて助け合う空間が狭められている。人間が機械に使われるようになりつつある。命は一回きりのものであり、取り換えのきかない軌跡であることを思うとき、振り返ることの中に深い意味を見出すことは、命に意義と価値を見出す一つの尊い行為であることを信じる。このエッセイ賞がその一つの縁になることを願っている。



佳作

「安倍家三代記」	相模次郎	「義母終のことば」	家森澄子
「父と猪」	富登千恵子	「猫と神」	みな熊々
「息子の入院」	大杉綾	「すてきな星」	田中修
「母の祖」佐佐木吉田厳秀「の里を訪ねて」	田浦チサ子	「白鳥の歌」	白葡萄
「がんのこと、お子さんに伝えますか?」	秋谷進	「前途晴朗なり」	小倉一純
「世のため人のため」	高浜富士夫	「でこぼこ」	山田牧
「聖バレンタインの贈り物」	平野靖雄	「ノアガーデン」エリザベス」	栗山佳子
「性欲の強い店主」	ふきのとう	「似て非なる二人」	柴田節子
「墓場の前の別荘」	林英二	「ミッションスクール育ちが寺に嫁ぐと」	森下文乃
「あぶくとはいわせない」	高尾周一	「太宰先生のお膝元」	山田まさ子
「それでも生き抜こう」	佐高源	「暇つぶし」	佐久間隆史
「私を彩るもの」	福山由美	「玄関を、飾る」	風蔭きやん
「日本の心」	新垣景和	「静御前と小さな鉄瓶」	武藤養子
「誤信信仰」	秋葉みのり	「八十路の戸惑い」	ゴルビー長田
「サントーシヤさんと話して思う事」	宮原真希	「人生の勲章」	澤井樹生
		「レターラックに佇むスイカと波」	小原友紀
		「ロンドンにあえて幸せ」	壬生智恵



みずき りょう

作家・劇作家・演出家
1942 北朝鮮生まれ
99 小説「祝祭」で
第16回織田作之助
賞受賞
2006 小説「お見合いッ
アー」で第49回農
民文学賞受賞
戯曲も多数ある

シニア世代の大切な記録

水木 亮

今回も年齢的に幅広い応募エッセイであった。

応募作品を見て、九〇歳を超えてなお挑戦するエネルギーに驚かされる。大切なことだと思う。またいろいろな職業を退職された方のエッセイも、退職後の試みとして文章に改めて挑戦する意気込みを感じる。太平洋戦争を直接また間接的に経験された方の、遺言とも言うべき貴重な体験を、エッセイにまとめて発表することは意義深い。いろいろなエッセイを読むことができて、私は自分なりに学びをすることができた。学ぶことは新しい発見があり楽しい。次回も皆さんの元気なエッセイを期待している。

優秀賞から見てゆきたい。

三浦みな子さんの「乳を取る」は、全体的に文章がうま

が義父の記録は空白になっている。その過酷な思い出を象徴する義父使用のスプーンを書いていて、悲しみが伝わる。

西島雅博さんの「引き揚げ船の悲劇」は、同世代を生きた人間が生きているうちに書かねばならぬことを書いた。エッセイとは異なり小説風に書かれている。どちらかに徹するとさらに良いだろう。

今井清賀さんの「ロバのパン、追いかけて」は楽しいエッセイで心が和む。

その他記録しておきたい作品をあげてみたい。

いっちゃんさんの「前を向いて生きる」。精神病が発症の妻を、苦勞しながら介護する姿を書いた。改行が一度もないなど、文章上の問題は学べばわかることだが、それほど一気に書いているところに、書き手の強いリアルな思いを感じるのである。この作品に共感する人がいることを信じて頑張っ

てほしい。

内藤栄介さんの「夫婦は相見互い」は、体を病んでから結婚し、今度は妻が事故で病むことになり、寄り添う姿を書いた。苦境にある人々を励ますエッセイである。

武藤養子さんの「静御前と小さな鉄瓶」は、満州で暮らした伯母の思い出がここに残る。

幸村篤さんの「春の愁い」は里親と里子の想いが書かれている。

村松佐保さんの「遺伝性疾患に苦しむ我が子ジャーマ

かった。一生懸命に生きたが癌になった、その手術中のいろいろな想い、女性の生きざまがリアルに描かれていて心が伝わる。

高たかよさんの「ひと夏とイルカ」は、アルバイトで経験したイルカを書いた。題材はともよいと思う。ただ、もう一息イルカとのかかりについて追求性が欲しいところである。

瀧沢鈴さんの「みそまんじゅう」は九七歳の方が書いている。不運な若者の思い出であるが、この内容は、作者が生きているうちに是非書いておきたい記録でもあったと思う。こうして作品となり、若者も浮かばれると思う。

宮尾美明さんの「西日」は毎年応募されている方の作品だが、老いてこそよくわかる、旧友との黄昏の別れがしみじみとよく書かれている。

青地久恵さんの「南北之塔」は、あまり知られていない、アイヌの沖縄戦死を書いていて貴重な記録であると思う。

中田重顕さんの「母の満州」は母と満州の記憶を書いた。作者が現地を訪れていることがリアルで、読ませる。

小林宏子さんの「ひとつの約束」は戦死した父親への約束を、歳月を経て母親の代わりに果たす内容である。作者はこれをもって安らぎを感じたことであろう。

奨励賞を受けた中村郁恵さんの「背筋」は、義父のシベリア抑留とその後の生き方を書いた。一番きつい時のこと

ン・シエバード」は愛犬を亡くした切ない想いを書いている。

高齢者のたそがれの日々をどう生きるか。そのなかにあって、私は演劇を生きがいとして生きてきた。私は山梨県に関する歴史上の事件人物を自分で戯曲化し、五〇年以上上演劇として上演して来た。ところが八〇歳を超えて、体力的にいろいろ制限も出てきた。そのなかで、「文芸思潮」のエッセイコンクールの作品に触れることはとても刺激になる。そこには、「動けるうちに動く」「書けるときに書いておく」というような高齢者の作品や、病気など社会的に厳しい環境で創作している作品が多く見られるからだ。それらの作品に力点を置く「文芸思潮」は日本の文芸誌では特別だと思う。そろそろ百号を迎えるそうだが、そういう高齢者を大事にする文芸誌が日本にあってもよい。来年もみなさんの多くの作品が寄せられることを期待している。



御注文はアジア文化社まで

入選

- | | |
|------------------|-------|
| 「かわりばんこ」 | 斉藤はな絵 |
| 「都会の墓地」 | 太田 悠 |
| 「こんにちは 赤ちゃん」 | 九条之子 |
| 「白いネクタイ」 | 団周五郎 |
| 「長瀬肯定論―猿一匹、歌え侍―」 | 薩摩 |
| 「トイレのなかのおばさん」 | 椎木友理 |
| 「泡となつて」 | 阿彦美咲 |
| 「春の愁い」 | 幸村 篝 |
| 「よっちゃん」 | 安部としき |
| 「長い旅」 | 西尾 吉 |
| 「就活について」 | 柳川 隆 |
| 「『山の上ホテル』休業によせて」 | 牧 康子 |
| 「生命の多様性と永続性」と | 酒井恵三 |



- | | |
|----------------|--------|
| 「故郷は、永遠なり」 | 佐藤悦弘 |
| 「青女」 | 長坂弥生 |
| 「ラジオの魅力」 | 野宮健司 |
| 「義母と水ようかん」 | せがわけいこ |
| 「ファルセットに恋をして」 | 堤 洋子 |
| 「蘇鉄の花に想う」 | 天城 嘯一 |
| 「リボーン」 | 松尾なおゆき |
| 「僕とマウスピース」 | 川和真之 |
| 「胡蝶蘭とスマイル」 | 佐生綾子 |
| 「私、これからどうしたい？」 | 古池真矢 |
| 「閑さされた家の中で」 | 野間瑠希心 |
| 「胡蝶蘭が咲いた休日」 | 沼田識史 |
| 「ベルリン」 | 風間麗子 |



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ
東海大学文学部卒
2002「看板屋の恋」で第
91回文学界新人賞受賞
「狼を見る」(文芸思潮)
「ご眷属様ジャーニー」(三
田文学)他「長者屋敷の寝
られぬ座敷」(合作)で佐々
木喜善賞など 構成作家と
しても活動中

迷ったら、モンテニューへ立ち戻れ

都築隆広

下馬評が高かったというか、単純に審査員達の合計得点が高かったのは奨励賞「背筋」だった。しかし、実際に最優秀賞となったのは、二番手三番手についていた「ガザに生きる」だ。採点表では高得点をつけている作品が、意外や最優秀賞になれなかったりするもの、この選考会の恒例となりつつある。私も「背筋」には高得点を付けたものの、「ガザに生きる」が競り勝ったことに、反対はしなかった。義父のシベリア抑留について語った「背筋」は普通の家庭に残った、生々しい歴史の傷痕といった物語である。ただ、作中でキーとなるアイテムは義父がシベリアから持ち帰ったスプーンであり、「どう考えてもタイトルは『背筋』じゃ

なくて、『スプーン』だろ」というツツコミは回避できなかった。一方、「ガザに生きる」の方は社会批評賞ジャンルだと推察し、これを通常のエッセイと并列に語るのにはアンフェアなようにも感じた。しかし、五十嵐勉選考委員の「体験談なのだから、これは通常のエッセイとして扱うべきだ」という弁に納得させられた。こちらが積極的に推せなかった理由は、結末の重要な部分で俳句が出てきてしまう点だった。一つ一つの句は真摯で、雑音にはならないものの、重要な部分は他の表現手段ではなく、エッセイらしく、地の文で語って欲しかった。

次に優秀賞の「乳を取る」。乳癌手術を受ける女性の話で、なんといっても、ノースフェイスのパーカーを死神が着ているという場面が現代的で痛快だ。冬に新宿駅の改札を通れば、やたら値段が高い、このアウトドアブランドの服を纏いし都会人共がアルタ前を闊歩していることだろう。山梨キャンパーたる私からしたら、「東京で、その防寒性能は無用の長物であろう」と唇の端から嫌味が零れ出るも、よもや死神まで着用するようになったとは滑稽の極みだ。勿論、それ以外の育児や病気の部分も、リアリティーがあって読ませる。

同じく優秀賞の「ひと夏とイルカと」。実は私が最も支持したのはこのエッセイであった。なかなか覗き見ること

第20回 文芸思潮エッセイ賞 作品募集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしのなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

趣旨●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化する。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格）。

応募規定●4000字以内。極力パソコン印字で。※応募原稿は返却しないので、コピーを取り、コピーの方を送付すること。パソコン・ワープロ原稿は横長A4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。

別紙に①応募部門（2025第20回「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム④ふりがな（どちらにもふりがなを）⑤年齢・生年月日・性別⑥住所〒（必ず郵便番号を明記のこと。ないものは失格）⑦電話番号⑧職業・略歴※①～⑧でこれらが厳守されていないものは失格となる。

応募審査料●1800円を郵便為替（郵便局で購入）で同封のこと（為替には無記入・無押印）。外国からは14USドルを同封。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

TEL03-5706-7847 FAX 03-5706-7848

E-mail bungeisc@asiawave.co.jp

賞●最優秀賞■賞状・トロフィー・賞金10万円（2名は7万円／3名は5万円）

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上は2万円）

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状・記念品

選考委員●三神弘・水木亮・都築隆広・五十嵐勉

締切●2025年3月31日（当日消印有効）

発表●予選通過作品発表は2025年6月25日発売の「文芸思潮」96号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終結果・最優秀作および優秀作は2025年9月25日発売の「文芸思潮」97号に発表掲載。奨励賞も順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、あなたの真の声を乗せたエッセイ作品をお寄せください。



ができない水族館のバックヤードを描いた作品だが、実は要素のみを抜き出すと、単に夏休みにアルバイトをしたというだけの話である。エッセイの審査をしていると、「大変な体験をしたもの」か「大変な病気にかったもの」かの題材で、上位陣が占められてしまう。「ガザに生きる」は前者であり、「乳を取る」は後者である。「背筋」は「体験の伝聞」であるがゆえに、選考会では二者に競り負けてしまった。それだけ「体験」と「闘病」、そして「死」というテーマは、現代日本でエッセイを書くにおいて避けては通れない三大要素といえよう。「ひと夏とイルカと」も「水族館」という特殊な環境でのアルバイト「体験」が主軸になってはいるものの、そうはいっても「アルバイト」である。特殊過ぎない「体験」をセンス良く、カラーージュしている点が評価できた。

可愛いタイトルの優秀賞「『団子ちゃん』は何者？」は娘の脂肪肉腫を切除するという、全然、可愛くない内容で、闘病記を明るい文体で語った手腕には脱帽である。同じく優秀賞「西日」は絵画教室で出会った親友が認知症にかかる話。ラストのくだりがかなりドラマチックだった。私も学生時代に絵画教室に通っていたので、共感しながら読んだ。優秀賞「みそまんじゅう」は古き良き函館の風景と、あたたかな人間ドラマが描かれる。

さて、世の中は不思議なところで、ヘーゲルの弁証法や

「超ひも理論」については理路整然と説明ができて、「駅からコンビニに寄って、弁当を買って家に帰ってきた」というだけの出来事を上手に語ることができない人も少なくはない。その逆もまた然りで、難しいことは書けずとも、当たり前のことを当たり前に語れる人もいる。インターネットの発達によって、前者が増えているように感じるが、エッセイというジャンルにおいては、断然、有利なのは後者の方だ。

清少納言や兼好法師を除くと、世界で初めてエッセイを書いたのは、フランスの下級貴族、モンテーニュといわれている。彼はエッセイの語源にもなった「エッセー」（原二郎訳、岩波文庫）の序文で、将来、死別するであろう身内のために、ありのままの自分について書いたとし、「読者よ、このように私自身が私の書物の題材なのだ」と述べている。エッセイに限らず、創作全般において、伸び悩んでいる人は外部に題材を求め過ぎているきらいがある。そういった時には、このシンプルなモンテーニュの言葉を思い出し、一息ついてみるのも一考なのではあるまいか。

